研究ノート

アルゴスのディラスにおけるミケーネ文化崩壊以降の埋葬と社会

髙橋裕子

はじめに

ミケーネ文化が崩壊したあとのギリシア世界は、いずれの地域もしくは集落においても何らかの社会変動を経験している。ただしその変化の様相は千差万別であった。たとえばミケーネのように急激に勢力を減退させた集落もあれば、[1]むしろ活性化したと表現しうるところもある。その中でとりわけ複雑な様相を呈していたと推測されるのが、アルゴリス地方のアルゴスである。

アルゴスはミケーネ時代において大集落ではあったが、ミケーネやティリンス、ミデアなどの第一級の集落には及ばない地位に甘んじていた。しかし初期鉄器時代に入ると一気に勢力を伸張させ、やがては平野を統一してポリスを形成することとなる。かかる大きな変化を遂げたアルゴスにとって、重要な転換点となったのがミケーネ文化崩壊後から初期鉄器時代前期（土器の編年区分で言えば、後期青銅器時代ⅢC期、亜ミケーネ期、そして原幾何学文様期）である。そしてこの頃アルゴスにおいては、埋葬習慣の違いから下記三つの集団が存在したことが確認されている。

①ミケーネ時代以来の横穴墓を使用していた集団

②単葬墓を造営した集団

③火葬墓を伴う墳丘墓を造営した外来集団

これら三つの集団相互により生成される複雑な緊張関係が、当時のアルゴスには展開されていたことが推察されよ

う。その具体像を解明することは筆者が追求する課題の一つであり、既に③については別稿にて紹介した[2]。そこで本稿においては①の資料を取り上げ、さらなる研究の礎としたい。

今までに発見されているアルゴスの横穴墓群は、ディラスという場所に営まれた墓地である。以下、第1章においてはディラスの墓地の概要と研究史を紹介し、第2章においては後期青銅器時代ⅢC期以降の資料を検討する。また資料は本稿末尾の一覧にまとめてある。

第1章

ディラスの墓地はアルゴスの市街地の北側、アスピスの南西側の麓に造営された埋葬施設である（図1）。長期にわたって使用されたことが確認されており、その最初期は後期青銅器時代ⅡA期にまでさかのぼる[3]。この頃の資料の一つとして、アテネ国立考古博物館が所蔵する宮殿様式(palace style）の土器が言及されよう（Athens, National Archaeological Museum 7107）[4]。おそらく元来は横穴墓から掘り出されたものである。

その後、後期青銅器時代ⅢA期およびⅢB期にこの墓地は最盛期を迎える。ディラスがミケーネ時代のアルゴスにおける中核的な埋葬場所であったことに疑念の余地は無い。現在に至るまでアルゴスではトロス墓が発見されておらず、横穴墓は社会的に相当程度格式の高い墓であったと判断されるが、ディラスはその横穴墓が密集した大規模な墓地であった[5]。

調査史について述べると、ディラスでは一九〇二年から一九五八年にかけてフランスの調査隊による発掘が断続的に行われた[6]。その結果、四〇基前後の横穴墓と三〇基前後の単葬墓の存在が明らかにされるという大きな成果が獲得された[7]（図二）。これらの墓はその位置から三つのグループに分けることができ、南側のグループには横穴墓Ⅰ～Ⅸが、そして中央と北側のグループには横穴墓XI～XXXVI bis および単葬墓が含まれる。横穴墓や単葬墓以外では、未だ時期や機能が不明の〝羨道(dromos)X〟も発見された。トロス墓ではないかという意見があったが否定され、その後の議論においてもこの遺構に関して諸家が納得しうる結論は得られていない[8]。

さらに一九七〇年にはギリシア人考古学者によりラリッサの麓で緊急発掘が行われ、さらに二基の横穴墓が調査された。この発掘によりディラスの墓地はそれまで考えられていたよりも範囲が大きいことが確認された[9]。

また二〇一〇年からは新しいプロジェクトが開始され、

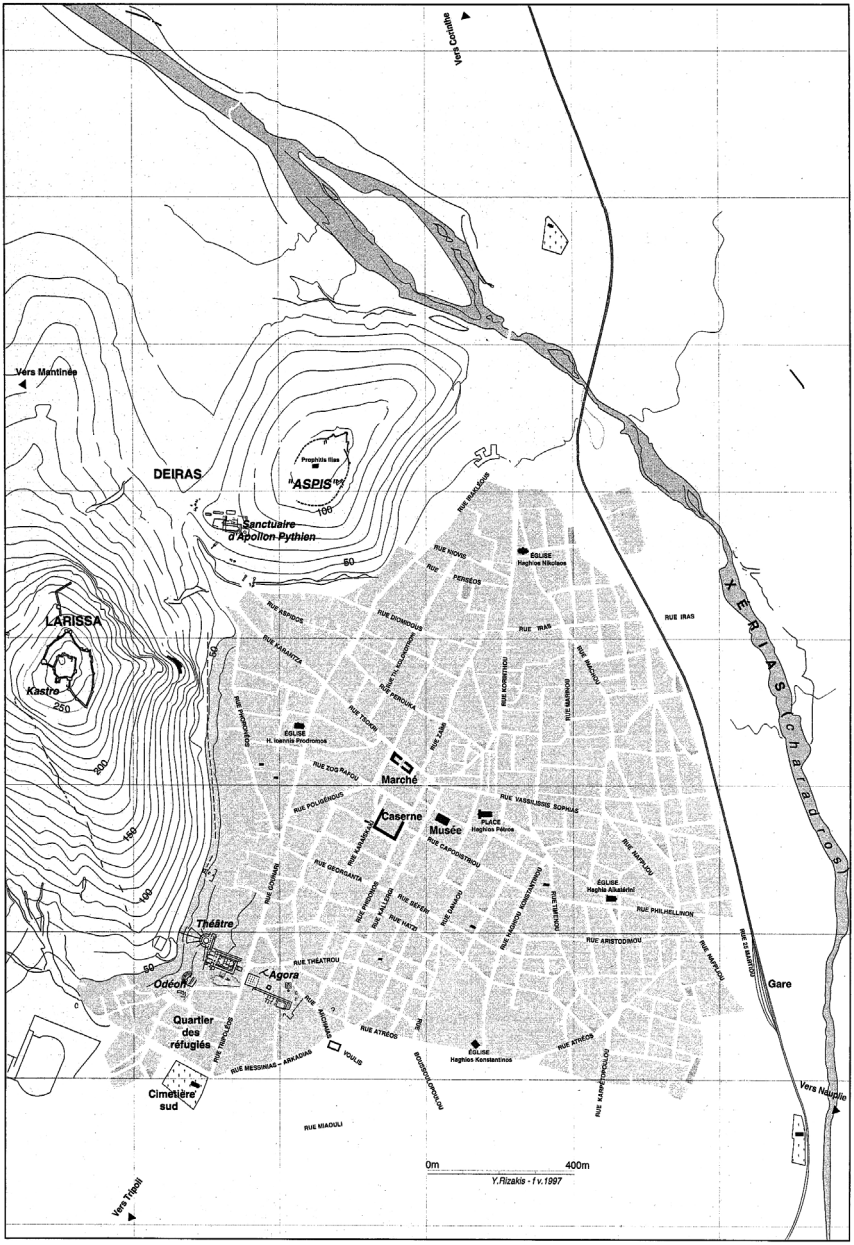

図１：アルゴス（出典：Pariente & Touchais eds. 1998, pl. V）

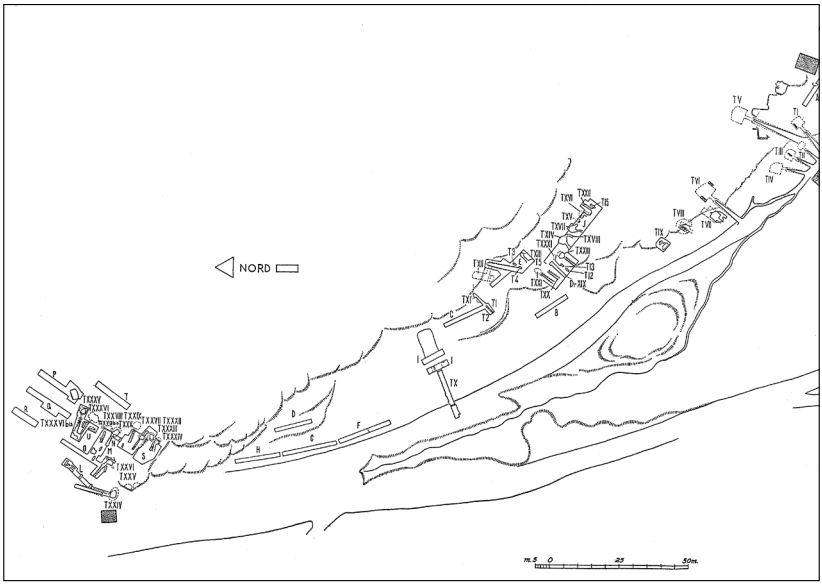

図２：ディラスの墓地（出典：Deshayes 1966, pl. I）

過去の調査の遺物が詳細に再検討されたり、科学的な分析が行われたりしている。既にその成果が徐々に公開されつつあり、新しい知見がもたらされている。幾何学文様期の土器片に関する研究も進展しており、横穴墓が放棄されたあとのディラスについても詳らかにされることが期待されよう。[10]

この新プロジェクトの成果を中心にディラスに関しては従来明らかにされていなかった資料やデータが今後発表される可能性が高い。本稿においては執筆時点において筆者が入手できた情報を基に、以下記載していくこととする。

第２章

本章においては、後掲の一覧のデータをもとにディラスの墓地について若干の検討を行っていく。

（1）後期青銅器時代ⅢC期における使用状況

後期青銅器時代ⅢC期における初期、中期、後期の三つの時期の内、初期の資料が出土しているのはⅡおよびXX号墓である。数は少ないが使用されていたことは確実であり、おそらくミケーネ時代以来ディラスの墓地を有していた人たちがそのまま継続して使用した痕跡であろう。

ⅢC期におけるそれ以外の資料は後期に属しており、墓の数は七～八基である。それではⅢC期の中ごろのディラスはどのような状況にあったのであろうか。放棄されていたのであろうか、それとも偶然に資料が発見されていないだけであろうか。[11] これはディラスに関して指摘されている問題点の一つであり、[12] とりわけマウントジョイがⅢC期後期の使用に関しては“re-use”と記載していることは示唆的であろう。[13]

この問題に関して明確な答えを見出すことは今のところ不可能であるが、ただし考慮する必要があると思われる事柄が、本稿冒頭でも言及した、その頃突如アルゴスに出現した墳丘墓の存在である。現代のアルゴス市街の南側の一画から数基の墳丘墓が発見されており、とりわけトリポレオス通りの西側に位置する大型のものは発掘調査により多数の火葬墓が出土したことで知られている。その資料は若干の例外を除いてⅢC期の中期から後期にかけて集中しており、つまりその時期のアルゴスには在来の埋葬習慣とは異なる独自の風習を持った異質な人々が存在していたことを明示している。[14]

ということは、ミケーネ文化の崩壊による痛手のみならず、さらに異質の集団が入り込んできたことによる軋轢や問題が累積され、当時のアルゴスにおける混乱の度合いは一層深刻なものになっていた可能性がある。[15] ただしそれがディラスの墓地におけるⅢC期中期の資料の欠如と関係しているのか否か確実な証拠はなく、この問題は未だ解決できていない今後の課題と言えるであろう。

（2）後期青銅器時代ⅢC期における新しい墓の造営

後期青銅器時代ⅢC期もしくは亜ミケーネ期に使用されたディラスの墓は、大きく二つに分類することができる。一つはⅢA期やⅢB期などの資料が出土している（つまり、ⅢC期以前から存在していた）墓を使用した事例で、Ⅱ、ⅩⅣ、ⅩⅥ、ⅩⅦ、ⅩⅩⅨ、ⅩⅩⅩ、ⅩⅩⅩⅢ号墓がこれに該当する。二つ目はⅢC期になって新しく造営されたと推察される墓であり、ⅩⅩⅡおよびⅩⅩⅩⅠ号墓がそれに該当すると思われ、さらにⅩⅧとⅩⅩ号墓もその可能性が否定できない。[16] 新しく横穴墓を造る労力を考えるならば、これらは看過すべき事柄ではない。

この点に関して他遺跡の資料と比較すると、ディラスが特異な存在であることがより鮮明に理解されよう。たとえばミケーネ時代においてはギリシア最大の集落であったミケーネのデータと比較してみよう。ミケーネではおそらく総数で二五〇基を超える横穴墓が発見されているが、その内ⅢC期の資料が確認される横穴墓は一〇基である。[17] それ

ら一〇基の中でⅢC期に造営された事例は見い出すことができない。[18] 次に初期鉄器時代においてアルゴスと覇権を競ったアシネに関して言えば、現今の資料では八基の横穴墓がⅢC期に使用されたことが確認されるが、しかしやはりこの時期に新しく造営された墓は報告がない。[19]

このように、ディラスにおいては後期青銅器時代ⅢC期に一〇基前後の墓が使用され、またその内数基は新たに造営されたものであるという事実は、当該期のアルゴリスの横穴墓群の中でも稀有な事例である。全くの想像に過ぎないが、もしかしたらこれは上記（1）で記した事柄と関係があるのかもしれない。というのも新しい横穴墓はすべてⅢC期でも後期に属しており、すなわちこの場所での埋葬の頻度が再び活性化した後に造営されたものであるからである。証拠は存在せず単なる憶測ではあるが、ディラスの墓地の所有者たちは一時期この墓地の使用から離れていたがために、再利用しようとした際には新たに造らざるを得ない状況に直面したのかもしれない。

この後期青銅器時代ⅢC期がディラスにおいて新しく横穴墓が造営された最後の時期であった。次の亜ミケーネ期になるともはや新たな横穴墓が造られることはなく、墓地全体が廃絶へと向かうことになる。

（3）他地域からの搬入土器

後期青銅器時代ⅢC期後期にディラスの利用頻度は再度高まるが、かかる活性化した様相は搬入品からも推し量ることができる。[20]

まず土器に関しては、クレタおよびアカイアの製品と推測されているものが出土している。クレタ製の搬入土器はXXIX号墓の鐙壺（DV151）である。アルゴリスには青銅器時代終末期から初期鉄器時代前期にかけてクレタとの関係を有していた集落があったことは既に確認されている。[21] しかしⅢC期もしくは亜ミケーネ期の横穴墓から発見されることは珍しい。一方アカイア製の土器はXXⅡ号墓の鐙壺（DV89）で、さらにXⅧ号墓の鐙壺（DV59）に関してもその可能性が推察されている。

土器以外の製品としては、XXⅡ号墓の車輪状の青銅製品（DB11）がイタリアからの搬入品であると見なされている。

上記（2）で言及したミケーネやアシネ、さらにフィフティア（ボリアリ）やゴルツリアなど、[22] ミケーネ時代の横穴墓群がミケーネ文化崩壊後も利用された事例はアルゴリスにおいては幾つか知られている。ミケーネ時代以来の墓地を継承した人たちが各地に残存していた証であろう。その中でⅢC期後期のディラスの資料は質量ともに抜きん出

た存在であり、とりわけ上記の搬入品はそれを象徴する遺物である。ディラスの墓地を使用していた人たちが当該期の周辺一帯において優勢な勢力を保持していたことを示唆していよう。[23]

（4）墓地の終焉

ディラスの墓地はいつの時期まで使用されていたのか、換言すればいつ廃絶されたのか。この問題について、時期ごとに確認していくこととしよう。

まず亜ミケーネ期に関してであるがXXXⅢ号墓から土器が出土しており、さらにXXⅨ号墓の遺物も該当する可能性があることを考えると、この時期もやはり使用されていたと結論される。ただしⅢC期に比べてかなり資料数は減少しており、この墓地を利用していた人たちの集団が勢力を減退させたことをうかがわせよう。

問題は次の原幾何学文様期である。XXⅣ号墓から原幾何学文様期のアンフォラが二個出土しているため、この時期までディラスの横穴墓群は使用されていたと解釈することも不可能ではない。しかしこれら二つの土器はおそらく天井が崩壊したあと持ち込まれたものであり、横穴墓への埋葬というそれ以前の行為とは一線を画する性質を有している可能性を看過してはならない。[24]埋葬という解釈以外に、遺骨が出土していないことに鑑みるならば、墓所祭祀のように単に土器が埋納されただけという見解も排除はできない。いずれにせよそれ以前とは異なる人的活動が展開されたことになり、ディラスの墓地ではミケーネ時代以来の横穴墓における埋葬が原幾何学文様期に至るまで行われていたと解釈することは不可能であろう。

上記を要約すると、以下のようになるであろう。ミケーネ時代以来使用されてきたディラスの横穴墓群は後期青銅器時代ⅢC期後期においてもある程度の規模で使用されていた。しかし次の亜ミケーネ期には埋葬数は激減し、そしてこの時期を最後に廃絶された。その後原幾何学文様期においてはそれまでとは別種の習慣による埋葬ないしは他の人的行為がなされた、このように結論したい。

おわりに

ディラスの墓地はミケーネ文化崩壊後も放棄されることはなく、規模は縮小しているが、後期青銅器時代ⅢC期初期においても埋葬が行われた。ミケーネ時代の祖先たちからこの墓地を受け継いだ人々が、継続して利用したと見なしえるであろう。しかしその後、一時期使用されない時期があった可能性が高い。そしてそれには、異質な文化を有

する人々がアルゴスに入ってきたことが関係しているのかもしれない。異文化集団の新来により社会的混迷が深まり、ディラスの墓地を有する人々は一時期そこで埋葬ができない危機的状況に陥ったとも推測されよう。

後期青銅器時代ⅢC期後期になると墓地は再び活性化し、新しい横穴墓も造営された。また他地域からの搬入品も発見されており、この墓地を利用していた人たちが当該期においては相当程度の繁栄を享受していたことが推察される。

しかし亜ミケーネ期に入ると資料は激減する。そしてこの時期を最後にディラスの墓地は廃絶された。それはおそらくミケーネ時代以来この墓地を継承してきた人々の集団が消滅したことを示唆しているのであろう。

続く原幾何学文様期に関してはアンフォラが二個出土しているが、それが埋葬であれそれ以外の行為であれ、横穴墓における埋葬というそれまでの使用とは別種の行いであり、さらに別個の行為者（集団）によるものであろう。

アルゴスの青銅器時代終末期から初期鉄器時代前期にかけてはディラスの墓地のほかに、火葬墓を伴う墳丘墓、さらには単葬墓と三種類の埋葬習慣を持つ集団が存在した。ディラスの墓地が消滅するのと反比例するかのようにアルゴスでは単葬墓が急増し、初期鉄器時代における繁栄を担っていく。今後はこの時期の複雑なアルゴス社会の全体像を把握すべく、研究を進展させていきたい。

註

（1）ミケーネに関しては、拙稿「青銅器時代終末期におけるミケーネ」『西洋史研究』新輯第四四号、二〇一五年（以下、題名のみ）、七五―九〇頁、「初期鉄器時代のミケーネ ―埋葬資料の検討―」『史苑』第八一巻第一号、二〇二〇年、一一七―一四〇頁。

（2）拙稿「アルゴリスの後期青銅器時代ⅢC期における墓制と社会 ―火葬墓を伴う墳丘墓の資料紹介を中心に」『西洋史研究』新輯第四八号、二〇一九年（以下、拙稿「墓制と社会」と略）、五九―六四頁。

（3）それ以前の中期青銅器時代のディラスに関しては、cf. Deshayes 1966, 15-21, Dietz 1991, 281, Touchais 1998, 75, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 166.

（4）Demakopoulou ed. 1988, 89, no.20, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 174.

（5）ディラスの墓地の概要に関しては、Philippa-Touchais & Papadimitriou 2015, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2020. さらに、cf. Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015.

（6）Vollgraff 1904, Deshayes 1953, 1966, 1969. さらに、cf. Charles 1958, 275, Charles 1963, esp. 7-33.

（7）横穴墓以外に多数の単葬墓が発見されたことは、ディラスの重要な要素の一つであろう。単葬墓に関しては、cf. Lewartowski, 2000, 64-65.

（8）*BCH* 54, 1930, 480, Deshayes 1966, 23-28, Pelon 1976, 291-292, Papadimitriou 2001, 22, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 176, Philippa-Touchais & Papadimitriou 2015, 449.

（9）*AΔ* 26, B'1, *Χρονικά: 1971*, 1974, 76-78.

（10）Philippa-Touchais, Papadimitriou & Touchais, with Goumas, Prévalet, Géorgakopoulou & Hapiot 2012-2013, Philippa-Touchais, Papadimitriou & Touchais, with Bassiakos, Géorgakopoulou, Smirniou & Triantaphyllou 2012-2013, Philippa-Touchais, Papadimitriou & Touchais, with Kayafa, Paschalidis & Triandaphyllou 2014, Philippa-Touchais & Papadimitriou 2015, Philippa-Touchais, Papadimitriou, Touchais *et al.* 2015-2016, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2020, Philippa-Touchais, Touchais, Papadimitriou, Pappi, Papakonstantinou & Triandaphyllou 2020. さらに、cf. Konstantinidi-Syvridi, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Goumas 2014.

（11）ⅢC期中期の埋葬資料はディラスのみならずアルゴス全体で豊富とは言えない。Cf. Mountjoy 1999, 47, Thomatos 2006, 152, 252.

（12）ただし土器の時期に関して本稿の記載とは異なる見解を提示し、ⅢC期中期に使用されたと見なす文献もある。Cf. Philippa-Touchais, Papadimitriou & Touchais, with Kayafa, Paschalidis & Triandaphyllou 2014, 751, esp. n.41. これは新プロジェクトの年次活動報告であるが、K. Paschalidis の執筆箇所であり、おそらく土器の時期に関する見解も、プロジェクトチーム全体のものではなく、あくまで氏個人のものであろう。

一方でチームの主要メンバーたちは、ディラスに

はⅢC期中期の資料が欠如していると指摘している（Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2020, 63, cf. Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 179）。

（13）Mountjoy 1999, 51. ⅢC期初期に関しては、かかる記載はない（Mountjoy 1999, 41）。

（14）拙稿「墓制と社会」、五九―六四頁。

（15）想像をたくましくすれば外来者がアルゴスに定着し始めたⅢC期中期、ディラスの墓地の所有者たちは一時期この埋葬場所を使用できない状況に陥り、そしてⅢC期後期になって再びこの墓地を利用できるような生活環境に戻ったのかもしれない。

（16）Cavanagh & Mee 1998, 89においては、18、20、22号墓、そしておそらく31号墓は後期青銅器時代ⅢC期に建造され、いずれも小型であるという指摘がある（墓の号数がアラビア数字で記されている）。

（17）割合から言うとディラスには遠く及ばないことは強調されてしかるべきである。

（18）拙稿「青銅器時代終末期におけるミケーネ」、七九―八二頁。

（19）拙稿「アシネにおける後期青銅器時代ⅢC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料」『マテシス・ウニウェルサリス』第二二巻第二号、二〇二一年、二三〇―二三六頁。

（20）Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2020, 70.

（21）拙稿「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代ⅢC期から原幾何学文様期にかけての対外関係」『西洋史研究』新輯第四九号、二〇二〇年、六九―八四頁（以下、拙稿「対外関係」と略）。

（22）拙稿「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代ⅢC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料」『マテシス・ウニウェルサリス』第二一巻第二号、二〇二〇年、二三四頁。

（23）この（3）の項目で言及したディラス出土の搬入品の内、土器二個（DV89、DV59）と青銅製品（DB11）に関しては拙稿「対外関係」で取り上げていない。本来ならば扱うべき資料であったことを記しておきたい。

（24）原幾何学文様期のアルゴスにおいては竪穴を掘って造られる単葬墓が普及した。単なる推測に過ぎないが、XXⅣ号墓の天井が崩壊したあと窪地ができあがり、竪穴墓と同様の埋葬が行われうる状態であったのかもしれない。

文献一覧

Antonaccio, C. M. 1995: *An Archaeology of Ancestors: Tomb cult and Hero Cult in Early Greece*, Lanham.

Cavanagh, W. & C. Mee 1978: The Re-use of Earlier Tombs in the LH IIIC Period, *BSA* 73, 31-44.

—— 1998: *A Private Place: Death in Prehistoric Greece*, Studies in Mediterranean Archaeology CXXV, Jonsered.

Charles, R.-P. 1958: Étude anthropologique des nécropoles d'Argos. Contribution à l'étude des populations de la Grèce antique, *BCH* 82, 268-313.

—— 1963: *Étude anthropologique des nécropoles d' Argos*, Études Péloponnésiennes III, Paris.

Demakopoulou, K. ed. 1988: *The Mycenaean World: Five Centuries of Early Greek Culture 1600-1100 BC*, Athens.

Deshayes, J. 1953: Les Vases Mycéniens de la Deiras (Argos), *BCH* 77, 59-89.

—— 1966: *Argos: Les Fouilles de la Deiras*, Études Péloponnésiennes IV, Paris.

—— 1969: Les Vases Vollgraff de la Deiras, *BCH* 93, 574-616.

Dietz, S. 1991: *The Argolid at the Transition to the Mycenaean Age: Studies in the Chronology and Cultural Development in the Shaft Grave Period*, Copenhagen.

Foley, A. 1988: *The Argolid 800 – 600 B.C.: An Archaeological Survey —Together with an Index of Sites from the Neolithic to the Roman Period*, Studies in Mediterranean Archaeology LXXX, Göteborg.

Hägg, R. 1974: *Die Gräber der Argolis: in submykenischer, protogeometrischer und geometrischer Zeit —1.Lage und Form der Gräber,* Uppsala.

—— 1987: Submycenaean Cremation Burials in the Argolid ?, in R. Laffineur ed., *Thanatos: Les coutumes funéraires en Égée à l'âge du bronze : Actes du colloque de Liège (21-23 avril 1986),* AEGAEUM 1, 207-212.

Harding, A. F. 1984: *The Mycenaeans and Europe,* London.

Kilian-Dirlmeier, I. 1984: *Nadeln der frühhelladischen bis archaischen Zeit von der Peloponnes*, Prähistorische Bronzefunde XIII:8, München.

Konstantinidi-Syvridi, E., N. Papadimitriou, A.

Philippa-Touchais & A. Goumas 2014: Goldworking Techniques in Mycenaean Greece (17th/16th–12th century BC): Some New Observations, in H. Meller, R. Risch und E. Pernicka eds., *Metalle der Macht – Frühes Gold und Silber: 6. Mitteldeutscher Archäologentag vom 17. bis 19. Oktober 2013 in Halle (Saale)*, Halle (Saale), 335-348.

Lemos, I. S. 2002: *The Protogeometric Aegean: The Archaeology of the Late Eleventh and Tenth Centuries BC*, Oxford.

Lewartowski, K. 2000: *Late Helladic Simple Graves: A Study of Mycenaean Burial Customs*, BAR International Series 878, Oxford.

Mountjoy, P. A. 1999: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden.

Papadimitriou, N. 2001: *Built Chamber Tombs of Middle and Late Bronze Age Date in Mainland Greece and the Islands*, BAR International Series 925, Oxford.

Papadimitriou, N., A. Philiappa-Touchais & G. Touchais 2015: Argos in the MBA and the LBA: A Reassessment of the Evidence, in Schallin & Tournavitou eds. 2015, 161-184.

—— 2020: The Mycenaean Cemetery of Deiras, Argos, in a Local and Regional Context, in J.M.A. Murphy ed., Death in Late Bronze Age Greece: Variations on a Theme, Oxford, 60-88.

Pariente, A. & G. Touchais eds. 1998: *Argos et l' Argolide: Topographie et urbanisme —Actes de la Table Ronde internationale, Athènes-Argos, 28/4-1/5/1990*, Paris.

Pelon, O. 1976: *Tholoi, tumuli et cercles funéraires: Recherches sur les monuments funéraires de plan circulaire dans l' Égée de l' âge du Bronze (IIIe et IIe millénaires av. J.-C.),* Paris.

Philippa-Touchais, A. & N. Papadimitriou 2015: Deiras, Argos: The Mycenaean Cemetery revisited in the Light of Unpublished Finds from W. Vollgraff's Excavations, in Schallin & Tournavitou eds. 2015, 449-467.

Philippa-Touchais, A., N. Papadimitriou, G. Touchais *et al.* 2015-2016: Rapports sur les travaux de l' École française d' Athènes en 2014 et en 2015. Grèce. Argos. La Deiras, *BCH* 139-140, 828-842.

Philippa-Touchais, A., N. Papadimitriou & G. Touchais, with Y. Bassiakos, M. Géorgakopoulou, M.

Smirniou & S. Triantaphyllou 2012-2013: Rapports sur les travaux de l' École française d' Athènes en 2012. Grèce. Argos. La Deiras, *BCH* 136-137, 817-824.

Philippa-Touchais, A., N. Papadimitriou & G. Touchais, with A. Goumas, R. Prévalet, M. Géorgakopoulou & L. Hapiot 2012-2013: Rapports sur les travaux de l' École française d' Athènes en 2011. Grèce. Argos. La Deiras, *BCH* 136-137, 612-621.

Philippa-Touchais, A., N. Papadimitriou & G. Touchais, with M. Kayafa, K. Paschalidis & S. Triandaphyllou 2014: Rapports sur les travaux de l' École française d' Athènes en 2013. Grèce. Argos. La Deiras, *BCH* 138, 749-756.

Philippa-Touchais, A., G. Touchais, N. Papadimitriou, E. Pappi, N. Papakonstantinou & S. Triandaphyllou 2020: La Deiras revisitée: Nouvelles études sur la nécropole mycénienne d' Argos, *Bulletin archéologique des Écoles françaises à l' étranger*, 26 November 2020, 1-10 (https://journals.openedition.org/baefe/1720, 二〇二二年四月一日接続確認).

Schallin, A.-L., & I. Tournavitou eds. 2015: *Mycenaeans up to Date: The Archaeology of the North-eastern Peloponnese — Current Concepts and New Directions*, Stockholm.

Takahashi, Y. 2009: *Τα Έθιμα Ταφής στην Αργολίδα: Από την Μετανακτορική έως και την Πρωτογεωμετρική Περίοδο*, Ph.D thesis, National and Kapodistrian University of Athens.

Thomatos, M. 2006: *The Final Revival of the Aegean Bronze Age: A Case Study of the Argolid, Corinthia, Attica, Euboea, the Cyclades and the Dodecanese during LHIIIC Middle*, BAR International Series 1498, Oxford.

Touchais, G. 1998: Argos à l' époque mésohelladique: un habitat ou des habitats?, in Pariente & Touchais eds. 1998, 71-84.

Vollgraff, W. 1904: Fouilles d' Argos, *BCH* 28, 364-399.

（本学兼任講師）

ディラスにおける後期青銅器時代 IIIC 期以降の資料

ここではディラスの墓地におけるミケーネ文化崩壊以降の資料をまとめていく。その際、報告文献は主要なもののみを記載することとする[1]。また時期に関しては、本稿の対象である IIIC 期以降のものだけを記し、それ以外は除外する。

また各項目の１）では墓の形態[2]、２）では埋葬方法や遺骨に関する情報、そして３）では副葬品について記す。その際２）と３）においては、後期青銅器時代 IIIC 期以降の資料に焦点を絞ることとする。また３）においてはミケーネ土器（mycenaean pottery）に関する基礎的かつ今もって最重要な集成であるマウントジョイの著作における記載を付しておく[3]。最後の４）においては特記事項などその他の事柄を記す。

II 号墓

報告文献：Vollgraff 1904, esp. 374-375, Deshayes 1953, 62-65, Deshayes 1969, 578-583.

時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期

１）横穴墓

２）土葬

後期青銅器時代 IIIC 期に特定しうる遺骸はない。

３）後期青銅器時代 IIIC 期の土器が出土した。マウントジョイはこの墓から出土した後期青銅器時代 IIIC 期初期の土器（II-8、図 3）を紹介している[4]。

４）それ以前の土器が出土していることから、後期青銅器時代 IIIC 期に造営された墓ではない。

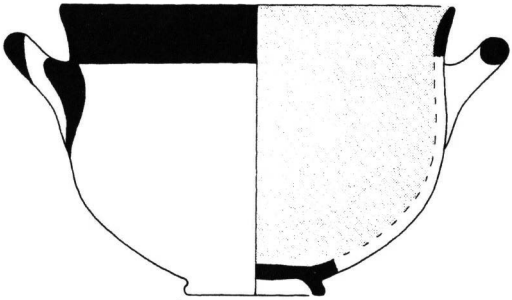

図３：II 号墓出土 II-8（高さ：11.4-5cm、出典：Mountjoy 1999, 157, no. 317）

XIV 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 39-46.

時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期[5]

1）横穴墓

2）土葬

後期青銅器時代 IIIC 期の遺骸が一体出土している。混乱した状態で発見された。当該期のレキュトス（DV26）を副葬品としていることからその時期と判断されている。付近からはさらに二個の土器（DV10, DV11）が発掘されており、やはり副葬品であった可能性が高い。

3）後期青銅器時代 IIIC 期の土器が出土している。マウントジョイはこの墓と関連があるアンフォリスコス（DV10、図 4）、レキュトス（DV26）、鐙壺（DV32）を紹介している[6]。

また長さ 37.8cm の青銅製のピン（DB3、図 5）も、後期青銅器時代 IIIC 期の可能性があろう[7]。

4）・それ以前の土器が出土していることから、後期青銅器時代 IIIC 期に造営された墓ではない。

・亜幾何学文様期の土器も出土した[8]。

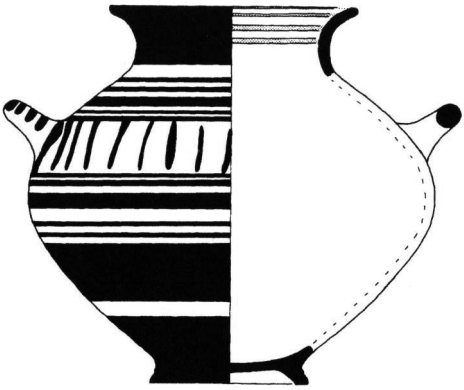

図 4 ：XIV 号墓出土 DV10（高さ：15.2cm、出典：Mountjoy 1999, 176, no. 374）

図 5 ：XIV 号墓出土 DB3（長さ：37.8cm、出典：Kilian-Dirlmeier 1984, pl. 6, no. 182）

XVI 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 46-50.
時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期
1）横穴墓
2）土葬
　墓室の北西壁の近くから出土した 2 号遺体（頭蓋骨）は、後期青銅器時代 IIIC 期後期の鐙壺（DV34）の破片と共に発見された[9]。
3）後期青銅器時代 IIIC 期の土器が出土しており、マウントジョイが鐙壺（DV34）を紹介している[10]。
4）・それ以前の土器が出土していることから、後期青銅器時代 IIIC 期に造営された墓ではない。
　・亜幾何学文様期や前古典期の土器も出土している[11]。

XVII 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 50-54.
時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期
1）横穴墓
2）土葬
　墓室の北壁の近くで出土した 9 号遺体の近くから後期青銅器時代 IIIC 期後期の土器 3 個（DV60, DV61, DV62）が発見されたので、その時期の埋葬と推察されよう。9 号遺体に関しては頭蓋骨と少数の遺骨片が発見された。
3）後期青銅器時代 IIIC 期の土器が発見された。9 号遺体の近くから発見された 3 個の土器の内、頸部が細い水差し（narrow-necked jug、DV60）と鐙壺（DV62、図 6）に関しては、マウントジョイが紹介している[12]。また長さ 19.3cm の青銅製ピン（DB1、図 7）も発見された[13]。

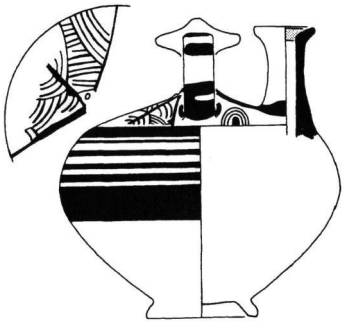

図 6：XVII 号墓出土 DV62（高さ：11.9cm、出典：Mountjoy 1999, 183, no. 419）

4）・それ以前の土器が出土していることから、後期青銅器時代 IIIC 期に造営された墓ではない。
・幾何学文様期の土器（DV12、DV51）、さらに幾何学文様期および前古典期の土器片が出土した[14]。

図 7：XVII 号墓出土 DB1（長さ：19.5cm、出典：Kilian-Dirlmeier 1984, pl. 12, no. 293）

XVIII 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 54.
時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期
1）横穴墓
2）土葬
　少なくとも三体の遺体が埋葬されていたが、副葬品などからその時期を特定できるものは存在しない。
3）出土遺物は少なく、番号が振られているものは土器 1 個（DV59）と青銅製のピン 1 本（DB2）のみである。DV59 は後期青銅器時代 IIIC 期後期の鐙壺で、高さは 10.2cm である[15]。アカイアからの搬入品ではないかと推測する意見もある[16]。また DB2 の長さは 18.4cm である[17]。
4）・DV59 と DB2 以外に土器片が出土しているが、写真や図面は存在せず、時期は不明である。もしもそれらが後期青銅器時代 IIIC 期であるならば、この墓は後期青銅器時代 IIIC 期に造られた可能性が出てくる[18]。
・亜幾何学文様期の土器が出土した。

XX 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 55-56.
時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期
1）横穴墓
2）土葬
　埋葬の痕跡として、屈葬の遺骨とさらに別の頭蓋骨が発見された。その内、屈葬の遺体は後期青銅器時代 IIIC 期の土器（DV71）と関係がある可能性が推察されている。一方、別の頭蓋骨は屈葬の遺体よりも時期が早いと推測されている。

3）遺物は多くなく、番号が振られているものは土器1個（DV71）と小型の青銅製品1個（DB9）のみである。DV71は後期青銅器時代IIIC期後期の鐙壺であり、高さは11.4cmである[19]。DB9は中央部に穴が開いた半球状の製品で、直径は1.8cmである。DB9も屈葬の遺体の副葬品の可能性がある。

4）確実とは言えないが、後期青銅器時代IIIC期に造営された可能性を排除すべきではないであろう[20]。

XXII号墓

報告文献：Deshayes 1966, 59-60.

時　　期：後期青銅器時代IIIC期

1）横穴墓

2）土葬

相当数の遺骨と頭蓋骨5個が発見されており、それらの埋葬すべてが後期青銅器時代IIIC期の可能性も推察されている。

3）番号が与えられている遺物は土器3個とその他の製品5個（番号は4つ）である。土器に関してはマウントジョイが後期青銅器時代IIIC期後期のDV84（アンフォリスコス、図8）とDV89（鐙壺、図9）を紹介している[21]。DV89はアカイアからの搬入品であると推察されている[22]。

土器以外の製品の内、DB2は指輪2個で、直径はそれぞれ2.5cmと3.5cmである。DB11（図10）は真上から見ると車輪のような装飾が施された直径3.6cmの遺物であり、イタリアからの搬入品であると推察されている[23]。DM34とDM35は小型の石製品で高さは双方ともに2cm、直径は2.6cmと3.65cmである。両方とも紡錘車として報告されている。

4）後期青銅器時代IIIC期に造営された可能性がある[24]。

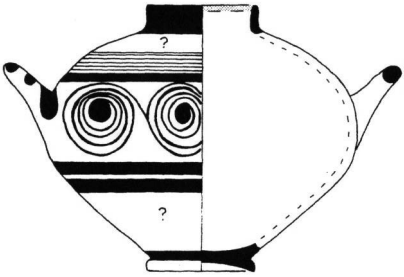

図8：XXII号墓出土DV84（高さ：10.4-10.6cm、出典：Mountjoy 1999, 176, no. 376）

図９：XXII 号墓出土 DV89
（高さ：15.5cm、出典：Mountjoy 1999, 183, no. 412）

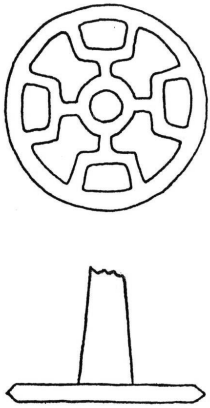

図 10：XXII 号墓出土 DB11
（出典：Deshayes 1966, pl. XXIV:8）

XXIV 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 64-69.
時　　期：原幾何学文様期

１）横穴墓

２）土葬の埋葬人骨が二体出土しているが、それらは後期青銅器時代 IIIA 期に属するものであり、本稿の分析対象からは除外される。

本稿の関心から言って重要な資料は、墓室の床面から 90cm 上の高さから発掘された原幾何学文様期のアンフォラ２個（DV98、DV107）である[25]。これらの土器がどのように持ち込まれたのかは、議論の余地が残る問題である。羨道を通って運び込まれた可能性も否定はできないが[26]、出土地点が床面から離れていることを考えると、墓室の天井が崩壊した後に置かれたと推察する方が妥当ではないか[27]。

さらにこれらの土器は遺骨と一緒に出土したわけではないが、火葬用の骨壺ではないかという可能性も視野に入れた議論が展開されている[28]。

３）上記のアンフォラ２個（DV98、DV107）は双方共に肩から頸部にかけて垂直の取っ手が付いているタイプで、原幾何学文様期の初期に属する[29]。DV98（図 11）は高さ 50cm で、肩に二つの渦巻き文様が描かれている。また胴部には独特の図柄が施されており、線文字 B との関係も推測されている[30]。DV107（図 12）は一部が欠損しており、残存部の高さは 43.5cm である。

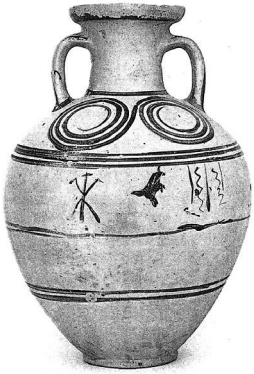

図 11：XXIV 号墓出土 DV98
（高さ：50cm、出典：Lemos 2002, pl. 81.1）

図 12：XXIV 号墓出土 DV107
（現存の高さ：43.5cm、出典：Deshayes 1966, pl. LXVII:2）

4）この墓は後期青銅器時代 IIIA 期に埋葬が行われたあと、使用されない時期が続いた。そしておそらく天井が崩壊したあと、原幾何学文様期に入って土器 2 個が持ち込まれた。それがいかなる人的活動であったのかを判断する確実な証拠は存在しない。埋葬の可能性が高いと思われるが、それ以外の解釈も排除すべきではないように感じる。

XXIX 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 90-93.
時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期もしくは亜ミケーネ期[31]
1）横穴墓
2）土葬
　相当量の遺骨が出土している。その内 1 号遺体は鐙壺（DV151）をはじめとする副葬品の時期から後期青銅器時代 IIIC 期（もしくは後期青銅器時代 IIIC 期／亜ミケーネ期）に属すると思われる。2 号遺体に関しては一切の副葬品は発見されなかったが、これも後期青銅器時代 IIIC 期の可能性が推測されている[32]。
3）1 号遺体には鐙壺（DV151、図 13）、青銅製のピン 2 本（DB17：図 14、DB18：図 15）、フィブラ 1 個（DB20）、指輪 1 個（DB19）、リング状の遺物 1 個（DB21）が副葬されていた。鐙壺（DV151）はクレタ製の可能性が指摘されており、マウントジョイはその時期を後期ミノア

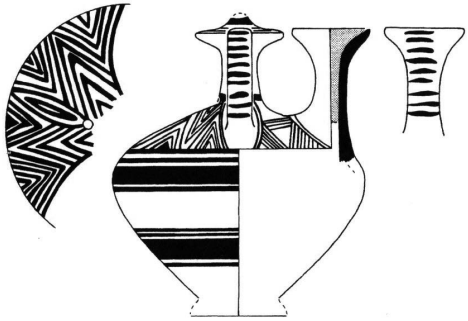

図 13：XXIX 号墓出土 DV151（現存の高さ：13.6cm、出典：Mountjoy 1999, 185, no. 423）

図 14：XXIX 号墓出土 DB17（長さ：23.3cm、出典：Kilian-Dirlmeier 1984, pl. 7, no. 203）

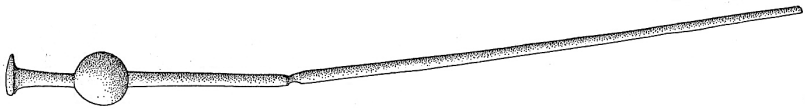

図 15：XXIX 号墓出土 DB18（長さ：22.8cm、出典：Kilian-Dirlmeier 1984, pl. 8, no. 204）

IIIC 期もしくは亜ミノア期と判断している[33]。この土器に関しては別稿にて既に紹介したため、ここでは詳細を省くこととする[34]。

4）・後期青銅器時代 IIIA 期の遺物も出土しており、この墓は IIIC 期に造営されたものではない。

・幾何学文様期の土器片や亜幾何学文様器の土製像、前古典期の土器片などが出土している[35]。

XXX 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 93-98.

時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期

1）横穴墓

2）土葬

相当数の遺骨が出土しており、最低限 11 体の遺骸がこの墓に葬られていた。しかし後期青銅器時代 IIIC 期初期の土器（DV189、DV190）が副葬されていた遺骸は特定されていない。発掘されていない墓の北側部分に存在する可能性が推測されている[36]。

3）後期青銅器時代 IIIC 期の土器が出土している。マウントジョイはこの墓から出土した IIIC 期初期の土器（DV189：図 16、DV190：図 17）を紹介している[37]。

4）・後期青銅器時代 IIIA 期の土器も出土しており、この墓は IIIC 期に造営されたものではない。

・この墓が後期青銅器時代 IIIB 期から途切れることなく使用されていたのか、または一時期放棄されたあと IIIC 期に入って再使用されるようになったのかに関しては議論があり、確実なことは不明である[38]。

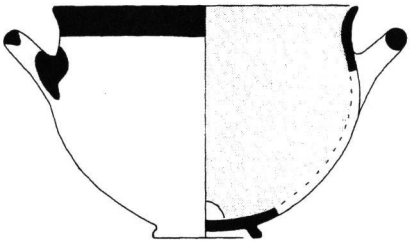

図 16：XXX 号墓出土 DV189（高さ：9-9.2cm、出典：Mountjoy 1999, 157, no. 318）

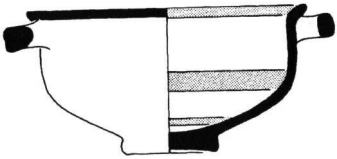

図 17：XXX 号墓出土 DV190（高さ：5.6-6cm、出典：Mountjoy 1999, 157, no. 321）

XXXI 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 61-62.

時　　期：後期青銅器時代 IIIC 期

1）横穴墓

2）土葬

後期青銅器時代 IIIC 期の土器 3 個（DV120：図 18、DV123：図 19、DV128：図 20）と発見された遺骨がある。

3）後期青銅器時代 IIIC 期後期の土器 3 個（DV120, DV123, DV128）をマウントジョイが紹介している[39]。他に青銅製ナイフ（DB6、図 21）、青銅製の指輪（DB7）も発見されている。

4）この墓は後期青銅器時代 IIIC 期に造営された可能性が指摘されている[40]。

図 18：XXXI 号墓出土 DV120
（高さ：11.9cm、
出典：Mountjoy 1999,
182, no. 410）

図 19：XXXI 号墓出土 DV123
（高さ：15.5cm、
出典：Mountjoy 1999,
182, no. 407）

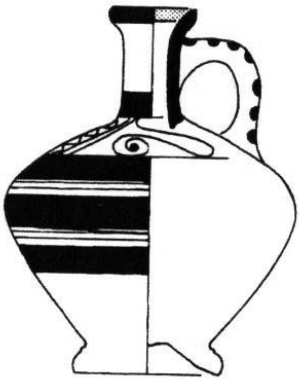

図 20：XXXI 号墓出土 DV128
（高さ：9-9.2cm、出典：Mountjoy
1999, 178, no. 386）

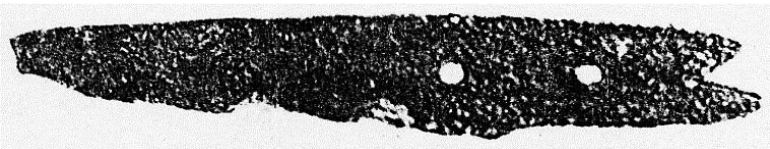

図 21：XXXI 号墓出土 DB6（現存の長さ：13.3cm、Deshayes 1966, pl. LXIV:3）

XXXIII 号墓

報告文献：Deshayes 1966, 98-101.

時　　期：亜ミケーネ期[41]

1）横穴墓

2）土葬

天井が崩壊した下の層から、亜ミケーネ期の土器（DV158）が出土した。その土器の周辺から多数の遺骨が発見されており、それが一人の遺体に属するのか、もしくは複数の被葬者のものか、不明である。

また DV158 に関しては、火葬用の骨壺か否かという問題が議論の俎上に載せられてきた。焼成の痕跡のある遺骨など火葬を裏付ける確実な根拠は存在しないため、土葬の副葬品と見なす方が妥当であろう[42]。

3）亜ミケーネ期の土器（DV158）は胴部に水平の取っ手があるアンフォラで、高さは 42.2cm である[43]。また同じレベルから、長さが 30cm 以上ある青銅製のピン（DB23）[44] と指輪（DB24）も発見された。

4）後期青銅器時代 IIIA 期の資料も出土していることから、この墓は亜ミケーネ期に造営されたものではない。

271 号墓[45]

報告文献：*BCH* 91, 1967, 840.

時　　期：不明[46]

1）箱形石棺墓

大きさは 1.55×0.75m である。

2）土葬

屈葬の遺骸が一体葬られていた。

3）土器は発見されなかったが、長さ 17.6cm の青銅製の槍先が副葬されていた。

上記以外の墓に関しても後期青銅器時代 IIIC 期に使用されたと判断している文献が存在する[47]。

註

（1）ここで記載する以外の文献に関しては、cf. Takahashi 2009, 503-518.

（2）墓の大きさなど詳細に関しては報告文献を参照のこと、もしくは cf. Takahashi 2009, 503-518.

（3）Mountjoy 1999. 本稿は後期青銅器時代 IIIB 期末におけるミケーネ文化の崩壊以降の時期を対象としている。しかし IIIC 期の土器は未だミケーネ文化の特徴を踏襲しており“ミケーネ土器”の範疇に含まれる。さらに続く亜ミケーネ期までマウントジョイの著作では扱われており、この時期に関しても基本文献と見なされている。

（4）Mountjoy 1999, 158 (no.317).

（5）この墓の使用時期は後期青銅器時代 IIIB 期までとする見解も見受けられるが（Deshayes 1966, 253）、後期青銅器時代 IIIC 期後期が最後であろう（Mountjoy 1999, 78, 80）。

（6）Mountjoy 1999, 175 (no.374), 177 (no.384), 184 (no.418). いずれも後期青銅器時代 IIIC 期の後期である。

（7）このピンに関しては、Deshayes 1966, 41, 44, cf. Kilian-Dirlmeier 1984, 66 (no.182), 67.

（8）Deshayes 1966, 40, 45-46, Antonaccio 1995, 20.

（9）Deshayes 1966, 48.

(10) Mountjoy 1999, 184 (no.417).

(11) Deshayes 1966, 46-47, Antonaccio 1995, 18.

(12) Mountjoy 1999, 175 (no.382), 184 (no.419).

(13) Deshayes 1966, 53, cf. Kilian-Dirlmeier 1984, 78 (no.293), 79. 後者の文献では長さ 19.5cm と記載されている。

(14) Deshayes 1966, 51, 52, 54, Antonaccio 1995, 19.

(15) Mountjoy 1999, 184 (no.421).

(16) Philippa-Touchais, Papadimitriou & Touchais, with Kayafa, Paschalidis & Triandaphyllou 2014, 751.

(17) Kilian-Dirlmeier 1984, 66 (no.177). この文献では高さが 18.2cm と記載されている。

(18) 後期青銅器時代 IIIC 期の後期に造営された可能性については、cf. Cavanagh & Mee 1998, 89, Mountjoy 1999, 78, n.213、Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 175. ただし、報告書では DV59 も DB2 も亜ミケーネ期と見なされている（Deshayes 1966, 54）。

(19) Mountjoy 1999, 184 (no.420).

(20) 後期青銅器時代 IIIC 期に造営されたという意見として、cf. Cavanagh & Mee 1998, 89, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 175.

(21) Mountjoy 1999, 175 (no.376), 184 (no.412).

(22) Mountjoy 1999, 179, Philippa-Touchais, Papadimitriou & Touchais, with Kayafa, Paschalidis & Triandaphyllou 2014, 751.

(23) Harding 1984, 142, fig.40.3, 143, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2020, 70.

(24) 後期青銅器時代 IIIC 期に造営されたという意見として、cf. Cavanagh &

Mee 1998, 89, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 175.

(25) Deshayes 1966, 66. 地表面から 90cm 下の場所から発見されたと記載する文献があるが (Antonaccio 1995, 19)、床面から 90cm 上である。

(26) Cf. Deshayes 1966, 246, Cavanagh & Mee 1978, 33.

(27) Cf. Hägg 1987, 208.

(28) Hägg 1987, Antonaccio 1995, 18-19.

(29) Lemos 2002, 13, 56, 158, 232.

(30) Deshayes 1966, 66, 149-150.

(31) 別稿にてこの墓は「おそらく後期青銅器時代 IIIC 期を最後に放棄された」と記したが、亜ミケーネ期の可能性がある遺物が出土しているとも指摘した（拙稿「対外関係」、69-70 頁）。亜ミケーネ期の可能性も加味して、本稿では「後期青銅器時代もしくは亜ミケーネ期」と記載することとしたい。

(32) Deshayes 1966, 93.

(33) Mountjoy 1999, 184 (no.423).

(34) 拙稿「対外関係」、69-70 頁。

(35) Deshayes 1966, 90, Foley 1988, 152, Antonaccio 1995, 18.

(36) Deshayes 1966, 94-95, 97.

(37) Mountjoy 1999, 158 (no.318), 159 (no.321).

(38) Cavanagh & Mee 1978, 33, Mountjoy 1999, 76, n.197.

(39) Mountjoy 1999, 177 (no.386), 179 (no.407, no.410).

(40) Antonaccio 1995, 21, Cavanagh & Mee 1998, 89, Mountjoy 1999, 78, n.213, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 175.

(41) レモスはこの墓の時期を亜ミケーネ期から原幾何学文様期初期への移行期と見なしている（Lemos 2002, 13, 158, 232）。

(42) Deshayes 1966, 246, Hägg 1974, 26, Hägg 1987, 208, Antonaccio 1995, 19-20, Mountjoy 1999, 79-80, Lemos 2002, 158 (n.71).

(43) Mountjoy 1999, 190 (no.452).

(44) 現存の長さに関して、Deshayes 1966, 100 (DB23) では 35cm と報告されているが、Kilian-Dirlmeier 1984, 70 (no.195) では 30.4cm と記されている。

(45) ディラスの Su82c から出土した（*BCH* 91, 1967, 839-840）。

(46) 土器は一切出土しなかったが、概報ではおそらく原幾何学文様期であろうと推測されている（*BCH* 91, 1967, 840）。確かに原幾何学文様期の可能性はあると思われるが、確実ではない。この墓に関する文献として、cf. Hägg 1974, 24, 28, 112, Lemos 2002, 22, 122, 232.

(47) ① XXXVI 号墓（横穴墓）：Deshayes 1966, 110-112, 247, Cavanagh & Mee 1978, 33, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 175, Table 4 (XXXVIbis).
② 24 号墓（単葬墓）：Deshayes 1966, 89, Lewartowski 2000, 65, Papadimitriou, Philippa-Touchais & Touchais 2015, 175, Table 4.